



Title	アリストテレスの『詩学』についての一考察
Author(s)	渡辺, 浩司
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/40516">https://hdl.handle.net/11094/40516</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	渡 辺 浩 司
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 13510 号
学位授与年月日	平成10年1月14日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科 芸術学
学位論文名	アリストテレスの『詩学』についての一考察
論文審査委員	(主査) 教授 森谷 宇一 (副査) 教授 神林 恒道 教授 上倉 庸敬

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、アリストテレスの『詩学』における悲劇論のうちで、効果論と筋構成論に相当する部分を取りあつたものである。全体は四部にわかれていて、第一部と第二部は主に悲劇の効果論に、第三部と第四部は主に悲劇の筋構成論にあてられている。

第一部では、『詩学』以外の著作も含めてアリストテレスの快樂論がとりあつかわれている。

第一章では、『詩学』以外の著作にみられる、快樂一般についてのアリストテレスの思想がとりあつかわれている。すなわち『ニコマコス倫理学』7巻11-14章、同10巻1-4章、『弁論術』1巻11章という三箇所における快樂一般についての議論が検討されて、その意味があきらかにされている。それによれば、これら三箇所における議論のうちはじめの二箇所におけるものと最後の箇所におけるものとは、その根本思想は同じであるが、その性格が異なるとされている。すなわち『ニコマコス倫理学』の両箇所における議論は、快樂の本質を問うものであって、快樂を、さまざま活動(エネルギー)に付随しそれと不可分なものとしてとらえており、「固有の快」というアリストテレスに独自の表現もこのような考えを反映したものである。これに対し『弁論術』における議論は、弁論の必要上からの快樂リストにすぎないものであって、快樂を運動(キネーシス)としてとらえているが、学習や驚嘆や模倣にともなう快樂の指摘は芸術論に通じるところを有している。

第二章では、『詩学』にみられる、悲劇の享受にともなう効果としての快についてのアリストテレスの考えがとりあつかわれている。そのさいその種の快は、「感覚的快」と「模倣(ミーメーシス)による快」とに二分されてとりあつかわれている。そのうち「感覚的快」に関しては、視覚的效果による快と音楽的效果による快についてのアリストテレスの考えが検討されて、いずれの快も二次的意義しか認められていないことが確認されている。これに対し「模倣による快」に関しては特に、詩作が成立した二つの原因のうちの一つとして挙げられている、模倣されたものによる快についての議論(4章)が検討されて、この種の快は認識的快であるとともに諸芸術に共通する快であることが確認されている。のみならず、模倣されたものによる快は、このような性格をもったものとして、「悲劇に固有の快」(14章)と呼ばれているものの前提をなすものでもあるとされている。

第二部では、「悲劇は……哀れみと恐れを通してこのような感情のカタルシスをおこなう」（6章）という、『詩学』のなかでも最も有名な、悲劇のカタルシスという問題がとりあつかわれている。

第一章では悲劇のカタルシスについての解釈の歴史がとりあつかわれている。すなわち上のカタルシス句についての古来の主要な解釈が、(1)イタリア・ルネサンス期の解釈、(2)倫理的解釈、(3)医療的解釈、(4)構成論的解釈、(5)知的・主知主義的解釈、(6)新たな倫理的解釈、とほぼ時代順に紹介され検討されている。それによれば悲劇のカタルシスということに関して、(2)は、哀れみと恐れとの喚起による感情全般の道徳的浄化と解するものであり、(3)は、哀れみと恐れとの喚起による同種の感情の吐瀉と解するものであり、(4)は、劇中の出来事を哀れみと恐れを喚起するようなふうへと純化していく構成上の技法と解するものであり、(5)は、哀れみと恐れを喚起する劇中の出来事が解明されることによる理解ないし認識の過程と解するものである。歴史的に言えば、近世において主流を占めていたのは(2)であったが、現代において有力なのはむしろ(4)と(5)である。

第二章では、同じ問題が論者自身の立場から追究されるとともに、「悲劇に固有の快」と呼ばれているものの意味があらためて解き明かされている。そのさい論者はまず、『詩学』という著作は、「制作術について」というその表題の元来の意味にも示されているように、悲劇をいかに制作するかを主題としているという事実注意到を喚起して、悲劇のカタルシスを観客に対する効果とみなす伝統的解釈をしりぞけようとしている。論者はまた、バルナイスをはじめとする従来の多くの研究者が悲劇のカタルシスを『政治学』8巻における音楽のカタルシスについての議論から解釈しようとしてきたのを批判して、いわば内在的に『詩学』そのものから問題を解明しようとしている。こうして、詩作が成立した二つの原因のうちの一つとして挙げられている、模倣されたものによる快についての議論がふたたびとりあげられるとともに、6章から9章までの悲劇の筋構成論が検討されて、悲劇において構成された筋がいかに認識的快を喚起するかがそこでは議論されているということが確認されている。ついで、カタルシス句の重要な項をなしている哀れみと恐れという両感情に関して、それらを喚起するために悲劇の筋はどのように構成されねばならないかという点についてのアリストテレスの議論が検討されている。そして結論として、悲劇のカタルシスとは、劇中の出来事からいまわしきや不浄な要素をとりぞいて哀れみと恐れを喚起するのにふさわしい出来事へと浄化する過程であって、その意味で作者の構成上の技法であるのに対し、「悲劇に固有の快」とは、そのような筋によって実現される観客への効果であるとされている。

第三部では、悲劇の種類を論じている『詩学』18章における、テキストの欠損箇所を読みと悲劇の第四の種類とされているものとめぐむ問題がとりあつかわれている。『詩学』18章では、悲劇には四種類があるとして、順に「複雑な悲劇」、「苦難的な悲劇」、「性格的な悲劇」が挙げられているが、第四の種類はテキストの欠損(†οης†と伝わるのみ)のために不明であって、この点についてさまざまな解釈がなされてきた。論者は、古字体学的考察を織り込みながらも基本的には、写本の読みとの整合性以上に『詩学』の議論全体との、特にその筋構成論との整合性から決定するようにしなければならないとしている。こうしてテキストの欠損箇所を読みと悲劇の第四の種類とに関して、(1)視覚的效果(οψις)を主とした悲劇とする説、(2)「エピソード的な(ἐπεισοδιώδης)悲劇」とする説、(3)ファーレンの説(テキストの欠損箇所を読みは「妖怪的なもの(τερατωδεις)」とするが、新たにつけ加わるべき悲劇の種類としては、「複雑な悲劇」と「苦難的な悲劇」とのあいだに「単純な悲劇」というものを想定する)、が順に検討されてしりぞけられている。そして結論として、テキストの欠損箇所を読みも悲劇の第四の種類も「単純な(ἀπλή)悲劇」とする比較的小数派の解釈がよしとされている。そのさい論者はまた、『詩学』18章における悲劇の分類は、逆転(ペリペテイア)と認知(アナグノーリシス)との有無という転換(メタバシス)の様式のちがいによる分類と、結末の幸不幸というちがいによる分類との組み合わせからなりたっているとしている。こうして悲劇の四種類のそれぞれについて、「複雑な悲劇」は、逆転と認知をともなつて転換が生じる悲劇、「苦難的な悲劇」は、結末が不幸になる悲劇、「性格的な悲劇」は、結末が幸福になる悲劇、「単純な悲劇」は、逆転と認知をともなわなわで転換が生じる悲劇と説明されている。

第四部では、ひとしく理想的な悲劇の筋構成を論じている『詩学』13章と14章のあいだでの結論の矛盾という問題がとりあつかわれている。13章では、ソポクレスの『オイディプス王』のように、立派な人と悪人との中間にある普通の人が過失(ハマルティア)によって不幸になるような構成の悲劇が最もすぐれているとされているのに対し、14章で

は、エウリピデスの『タウリケのイピゲネイア』のように、人物が認知によって不幸を回避するような構成の悲劇が最もすぐれているとされていて、この間の矛盾についてさまざまな解釈がなされてきた。論者は、両章の議論を仔細に検討して、13章では理想的な悲劇の筋構成が総合的に論じられているのに対し、14章では同じことがもっぱら哀れみと恐れという感情効果の面から論じられているということを確認したのち、従来の諸説（レッシングとファーレン、竹内敏雄、エルス、バイウォーター）の可否をも検討している。そして最後に、『詩学』の両章の議論は、それ以前の7章から11章までの議論をふまえたものであるとともに、「複雑な悲劇」と「単純な悲劇」、「苦難的な悲劇」と「性格的な悲劇」という悲劇についての二様の分類ともからみあっているとされている。

「むすび」では、より包括的な見地から、アリストテレスの芸術論がプラトンの芸術論と対比されて、両者の根本性格のちがいが論じられている。それによれば、プラトンが『国家』10巻で哲学的ならびに教育的な理由から、悲劇を含めた詩や絵画など模倣としての芸術を理想国家から追放したのに対し、アリストテレスはカタルシスや「悲劇に固有の快」という思想と厳格な筋構成論とによって、悲劇をいわば自律的なものとしてきわめて高く評価しているといえる。しかし他面から言えば、プラトンにおいては、芸術とわれわれの生活や国家とを結びつける見方がいまだ確保されていたのに対し、アリストテレスにおいてはそのような見方が失われつつあり、このことは彼の芸術論の限界ともなっている。そしてプラトンの芸術論とアリストテレスの芸術論との以上のような根本性格のちがいは、プラトンにとってはいまだ開放的であった「ソピアー（知恵）」の領域がアリストテレスによって専門化され体系化されることになるという、両者の知の根本性格のちがいに由来しているのである。

## 論文審査の結果の要旨

本論文の長所はなによりもまず、古くからアリストテレスの『詩学』の研究者たちを悩ませてきた、テキストの解釈と直結したいくつかの困難にして重要な問題と正面からとりくんでそれらを解明しようとする、その真摯な研究態度にあると言ってよかろう。『詩学』という著作は分量的にはきわめて小さなものであり、そこで論じられていることがらも一見してはさして難解でもない。しかしながら『詩学』のうちには、この著作の場合にかぎってアリストテレスが「言葉の偉大な節約家」（レッシング）とも評されるように、書物の成立の事情からも簡略化された多義的な表現が多いため、解釈がわかる箇所が多く、ときにはたがいに矛盾しているようにみえる箇所さえある。したがって『詩学』の研究とはまずもって、テキストの解釈と直結したそのような諸問題を解明することにある。本論文はそれらの問題のなかでも特に困難にして重要なものを取りあつかっているわけで、この点において論者の研究態度はまことに申し分ないものといえよう。

悲劇のカタルシスという問題はその種の問題のなかでも最大のものであって、さまざまに解釈されるとともに数多くの研究文献を生んできたが、本論文もその一端をなすものと言ってよかろう。この点からしてまず積極的に評価できるのは、悲劇のカタルシスについての解釈の歴史が的確に跡づけられていることであって、このような学説史的展望をもっておくことはとりわけこの種の問題の解明のためには不可欠なことである。悲劇のカタルシスについての論者自身の解釈は、カタルシスを観客に対する効果ではなく作者の構成上の技法とみなすものであって、伝統的解釈をしりぞけ現代において支配的な解釈傾向の一つに従うものであるが、そのような結論へ至る論証過程は十分に説得的であると評することができる。

悲劇のカタルシスという問題とならんで「悲劇に固有の快」という問題も重要であるが、この問題のとりあつかい方には本論文の独自性がいっそう鮮明にあらわれていると言ってよかろう。というのも本論文は、「悲劇に固有の快」という問題を悲劇のカタルシスという問題の枠内でとりあつかう通例の行き方に対して、前者の問題をひとまず後者の問題から切り離しそれ自体としてとりあつかい、ついで後者の問題を解明したのちにあらためて前者の問題を解き明かすというようにしているからである。論者によればそれは、『詩学』においては、悲劇のカタルシスという問題は一度だけただ提起されているにすぎないのにひきかえ、「悲劇に固有の快」という問題はともかく何度か論及されてい

るからである。そして本論文のこのような論述の手続きはいちおうそれなりに成功しているといえよう。

以上の二つの問題のとりあつかい方においてのみならず本論文全体を通じてのもう一つの長所は、古典文献学的な手堅さを十分にそなえているということである。先にも述べたように、『詩学』のうちには、解釈がわかれる箇所が多く、ときにはたがいに矛盾しているようにみえる箇所さえある。このため『詩学』に関しては、十六世紀に西洋世界で再発見されて以来、膨大な研究文献が蓄積されてきており、やや誇張して言えば、その一々の箇所に詳密な注や各種の文献がひかえているという感がないでもない。したがって『詩学』の研究者に特に求められることは、安易に恣意的ないし独断的な解釈に走ることなく、先行する研究の成果を十分にふまえるとともに、いたずらに多くの解釈にふりまわされることなく、テキストそのものに密着してその意味をあきらかにしようとする姿勢ではないかと思われる。このような規準に照らしてみるとき、本論文はその要請を十分にみたしていると言ってよかろう。第三部でテキストの欠損箇所に関して、写本の読みについての古字体学的考察が織り込まれていることも、特筆に値するところである。なお豊富な注も本論文の上述のような特徴を際立たせるものとなっている。

以上のように本論文は多くのすぐれた点を有しているが、あくまでも厳正に審査するかぎり、難点と思われるところも目につく。まず形式的な面から言えば、全般的にいま一段の推敲が望まれる。すなわち表現のレベルでは、事象を的確にとらえていないがゆえの不充分ないし不正確な表現が散見され、ときに術語的表現の不統一もみられる。また論理ないし構成のレベルでは、よく言えば粘着性の高い論述であるが、いささか明晰さに欠けるうらみがあるというべく、冗長さやまわりくどさの印象も残る。次に内容的な面から言っても、難点と思われるところがないわけではない。第一は、論文全体を通じての統一的主题がやや稀薄であるということであって、このことは本論文の題目にも反映されているように思われる。第二は、本論文がとりあつかっていることがらからしてある程度やむをえないところではあるが、論述のパースペクティブがいささか狭小にすぎるということであって、たとえば詩（文芸）一般の本質についてのアリストテレスの思想などはほとんどとりあつかわれていない。第三は、結論のいくつかがやや独自性に欠けるうらみがあるということであって、特に「むすび」の部分は、唐突でそれ以前の部分と充分にかみあっていないばかりか、かなり表面的で通説の域にとどまっていると言わざるをえない。

にもかかわらず本論文の価値は、以上に挙げたような難点と思われるところによっても、けっして決定的なまでにそこなわれているわけではない。『詩学』はある意味ではすでにあまりに研究しつくされているともいうべく、そのなかで新しい研究成果をつけ加えるのは容易ではないと思われる。たしかに本論文の結論のいくつかはかならずしも本論文に独自のものではないが、それらの結論へ至る論証過程は充分に高い水準に達しており、このことはこの種の領域の研究においてきわめて重要であるといえよう。

よって本審査委員会は本論文を、博士（文学）の学位に充分ふさわしいものと認定する。